

OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ



設立10周年を迎えた関東学院六浦こども園 これからも地域に愛され必要とされる存在に

今年1月に執り行われたこども園設立10周年記念礼拝と初のホームカミングデイの様子を紹介するとともに
鈴木直江園長に10年間の歩みを振り返っていただきました。

記念礼拝とホームカミングデイ

関東学院六浦こども園の前身である「関東学院教会幼稚園」が開園したのは1948年。以来、「女子短大付属幼稚園」「六浦幼稚園」と名称を変え、2013年に幼稚園と保育園の機能を併せ持った認定こども園「関東学院六浦こども園」へと生まれ変わりました。

今年1月27日には、関東学院大学横浜・金沢八景キャンパスのペンネットホールで、六浦こども園設立10周年の記念礼拝・式典が執り行われ、多くの在園児と保護者が参加。松田和憲学院長による公演、讃美歌斉唱、規矩大義理事長の挨拶、そして六浦こども園の鈴木直江園長からは謝辞が述べられました。また、年長クラスの子ども達が「歩こうイエスの道を」を賛美し、第2部ではプロの歌手によるコンサートも行われ、楽しいひとときを過ごしました。

午後開催した「第1回ホームカミングデイ」には、小学1年生から高校1年生まで約250名の卒園生が集い、友達や先生方との再会を喜びました。高校生の男子を保護者と見紛う先生がいたり、会場は驚きと感動で一杯に。終了後は六浦こども園に移動し、園内や庭を見学したり、遊具で遊んだり、アルバムやムービーを見て懐かしんでいました。卒園生の表情からは、園で過ごした日々が生きる力に繋がっていることが伝わり、先生方にとって大きな励みとなった一日でした。



試行錯誤だった設立当初

鈴木直江園長は、関東学院女子短期大学を卒業後、関東学院幼稚園（当時）に着任。以来、現在まで園の変遷を見守ってきました。

「こども園ができる頃、私は主任を務めていました。共稼ぎ世帯の増加という時代の流れや社会的ニーズもあり、前園長の根津美英子先生を中心に話し合い、より多くの方に来ていただけるこども園として新たに歩み始めることになったのです」

こども園設立にあたり、公立や私立の保育園に研修へ行き、万全の準備をしたつもりでしたが、最初の年は予想外の出来事が次々と起こり、試行錯誤と自問自答の日々だったそうです。

「短時間の幼児教育と長時間の保育では、利用する保護者の価値観も異なります。様々なご家庭の立場や状況に配慮しなくてはならず、保護者への手紙の出し方、



行事の日程の組み方など、全てにおいて従来のやり方を見直す必要がありました」

なかにはこども園へ移行したことに不安を訴える保護者もいたそうです。

「幼児教育と長時間保育では先生の働き方も異なるので、先生方にも様々な葛藤があったと思います。多様性を受け入れるとはどういうことなのか、改めて考えさせられた1年でした」

そんな中で救いとなったのは、やはり子ども達の笑顔です。

「大人達の不安をよそに、子ども達は分け隔てなく一緒に遊び、新しい環境にもすぐに順応します。そんな姿に励まされながら、やがて状況も落ち着き、少しずつ自分達の保育について振り返ることができるようになりました」

コロナ禍で再考した園のあり方

園長に就任した2020年4月は、まさに世界中がコロナ禍に突入した時期です。

「誰もが経験したことがない事態で、目の前の課題に一つずつ対処することに必死でした。ただ、実は翌年以降のほうが大変でした。陽性者が出ると、濃厚接触者を特定して行政に報告しなければならなかったからです」

食事などの様子を毎日撮影し、陽性者が出たら濃厚接触に該当する子どもを探して各家庭や行政へ連絡、一斉メールの配信など、連日多忙を極めたと言います。「今振り返ると、いろいろなことを考えなさいという神様の示唆だった気がします。それまで伝統があるから変えられなかったことも、何が今の子ども達にとって一番必要なのか、コロナ禍が改めて考えるきっかけになりました」

園庭改造と園外での活動推進

節目を迎えた六浦こども園。コロナ禍も収束した今、その取り組みをお聞きました。

「一つは、園庭改造です。自然の素材はどうして

環境の進化を続けるこども園

より良い園内環境をめざして改革に取り組み始めたのは、設立から2、3年後です。

「自由な遊びは、子ども達の好奇心や創意工夫を育む、成長の大事なプロセスです。この園では昔から、遊びの始まりと終わりは子ども自身が決めることを大切にしてきました。ですが、幅広い成長段階の子どもが共存するようになり、片付けをせず遊びつ放しになることが増えてきました。これは環境を変えなければいけないと、再びいろいろな施設へ見学に行きました」



関東学院六浦こども園 園長

鈴木 直江

関東学院女子短期大学幼児教育科卒業後、関東学院幼稚園に教諭として着任。2016年に六浦こども園副園長就任。2020年4月より現職。

も朽ちていくので、今の子どもに合わせ昨年から作り変えています。砂場を増やしたり、水場や焚き火場、キャットウォークを作ったり。秋には子ども達がわくわくする園庭へと進化する予定です。また、地域の子育て支援を担う立場として、園に来てもらうだけでなく、私達から地区センターなどへ出向いて、木育（木のおもちゃや木工から学ぶ体験）やアート活動を行う取り組みを一昨年から始めています。現在は専門スタッフもいて、今後とも継続していきます」

金沢区は横浜市の中でも特に少子化が進んでいる地域です。自然豊かで穏やかなこの地域に子育て世代が増えていくためにも、活動が期待される六浦こども園。これからも進化を続けていきます。

教育ビジョン「OLIVE STREAM」を柱に 改革を進める関東学院中学校高等学校の今と展望

今年で創立105周年を数える関東学院中学校高等学校。長い伝統を持つ同校に着任して4年目となる森田祐二校長に教育ビジョンに込めた思いや新たな取り組みをお聞きしました。

OLIVE STREAM



Science

6年一貫のサイエンスリテラシー教育



Technology

仲間とともに作り上げ、課題解決に挑戦する



Religion

真の国際人として宗教観を身につける



English

大学受験でも、海外でも通用する英語を学ぶ



Art / liberal Arts

人間の創造性を豊かにし自分に磨きをかける



Mathematics

大学受験にとどまらない数学的思考を身につける

自分らしい進路決定・目標達成のための力
自分の力を他者と共に用いるサーバントリーダー

教育ビジョンが表す同校の強み

2021年に着任した森田祐二校長。直後から取り組む学校改革の柱となるのが、教育ビジョン「OLIVE STREAM」です。科学（サイエンス）、技術（テクノロジー）、工学（エンジニアリング）、数学（マスマティクス）の頭文字からなる「STEM教育」は、米国から始まった理系重視の教育モデル。そこに芸術（アーツ）や教養（リベラルアーツ）を表すAを加え、さらに同校の学びの根幹である宗教のR（レリジョン）を中心に置き、独自の教育ビジョンとして提唱しています。また、Eには現代社会に必要な英語の意味も込めています。「この学校が長く実践してきた多様な教育を、わかりやすく繋いで表すことで、さらに発展させていくとともに、内外にきちんと発信しようと考えました。例えば、5つの実験室を有する理科教育。中学か

らバイオリンやギターに触れたり、陶芸室のろくろで作陶する芸術教育など、他校にはない恵まれた環境は本校の強みです。実際、本校では高2・3学年のほぼ半数が理系クラスですし、芸術系や音楽系に進む生徒もいます」

語学や文化、アントレプレナー系など興味に合わせて受講できる教養講座も人気を集めており、カリキュラムには表れない学びが豊富なことも特色です。そんな同校の強みを、森田校長は学校説明会等で次のように語っているそうです。「開けてみなければわからないという意味で、『チョコレートボックスのような学校』と表現しています。様々な色や形の中から選んで、好きな味を見つけるように、一人ひとりが興味のあることに取り組んで、失敗も経験しながら、最終的に自分に合った進路を選択できる環境をより一層アピールしていきたいですね」

思っています」

連携促進と施設更新に着手

最後に今後の課題をお聞きしました。「今年、関東学院大学の小山巖也学長の仲介で中外製薬との連携が実現し、戸塚にある創業研究施設で実験を体験する機会をいただきました。今後も様々な企業や大学と交流できる連携を増やしていくつもりです。施設面では、新しい体育館とグラウンド等の整備について法人とも話を進めています。子ども達にとって有意義な改革を進めていきたいと思っています」同校の教育にこれからも注目ください

探究型の学びに力を入れている



への研修旅行（選択制）を実施しますが、内容を見直し、現地で様々な問題に取り組む人達と意見交換します。高3では、それまでの活動をもとに自ら仮説を立てて検証する研究計画書を作成します」

中学3年間は地元横浜を中心とした探究活動を実施。中1は横浜を歩いて独自の視点でロゲイニングマップを作成。中2は地元企業での体験学習。中3は広島と長崎への平和をテーマとする研修旅行が、高校3年間の探究学習へ繋がっています。

「今ほどの学校でも課題解決型の探究活動を行っていますが、本校では『人間』に焦点を置き、社会課題に取り

組む大人（サーバントリーダー）との交流を通じて、自己変容のきっかけを掴むことを重視しています。また、それがキリスト教主義学校の探究のあり方だと

「R」が全ての教育の土台に

改革を進める一方で、キリスト教主義学校としての全人教育は全く変わりません。STREAM（流れ）の行先にあるのは、他者愛と奉仕の精神を持った「サーバントリーダー」の育成です。

「混迷を深める世界において、社会的立場の弱い人達の小さな声を聴くことができる人。キリスト教学校としてそういう人物を育成するのだという信念の上に、授業や行事・部活動、進路指導をしつかり行っていくことが大切であり、私達が『R』に込めた思いもそこに集約されています」

メディカルプログラムの発足

新たに力を入れ取り組んでいるのが、医学科志望者を対象とした「メディカルプログラム」です。

「学内で調べたところ、医学科志望者がかなり多くいることがわかりました。そこで、同じ目標を持った生徒達が共に学び合える環境を整えました。今年度は医学系に強い予備校の講師を招いた講座、大学、医療施設との連携で講演会や医療現場の見学などを行っています」

森田校長はこのプログラムが今後の進路指導の核になっていくと語ります。「このプログラムを受ける生徒達の周辺には、難関国公立を目指す子ども達が多くいます。互いに刺激し合い、高い目標に向かっていく雰囲気醸成していければと考えています」

もう一つの注目が「6年一貫の探究プログラム」の導入です。同校では従来から探究学習に力を入れていますが、中1から高3まで系統立った探究プログラムは全国的にも珍しく、早くも外部の教育関係者から関心が集まっています。「特に目新しいのが高1です。約240名の生徒を全国12か所に分けて送り出し、社会課題の現場を体験する『QST（探究ショートツアー）』を実施します。各地域で社会問題に取り組んでいる人達と交流し、その熱量を肌で感じるのが狙いです」

訪問先は北海道から九州まで、テーマはロボット開発、宇宙ロケット開発、移住問題、震災復興、地域再生、教育問題など多くの選択肢を用意しています。今夏から事前学習が始まり、11月にツアーを実施。事後学習を経て12月には発表会を行います。

「高2はこれまで同様、沖縄・台湾・韓国



関東学院中学校高等学校 校長

森田 祐二

愛知大学文学部英文学科卒業後、名古屋学院中学校・高等学校（現名古屋中学校・高等学校）に英語教諭として着任。同校校長及び学監を歴任。2021年4月より現職。

静岡県焼津市の委嘱でプロモーションに取り組む 関東学院大学法学部地域創生学科 牧瀬ゼミナール

徹底した現場主義のもと、地方自治体への政策提言を
実践している牧瀬稔教授とゼミナールの学生達。

現在取り組む静岡県焼津市との連携を中心に活動を紹介します。

地域創生と政策提言の実践

「私の専門は行政学をベースとした地域創生、まちづくりです。地方自治体からいただく課題に対して、学生達が現場に行つて問題を発見し、解決策を考え、市長や議会へ政策提言しています」と語るのは、関東学院大学法学部地域創生学科の牧瀬稔教授です。

牧瀬ゼミナールはこれまで神奈川県内はもちろん、岩手県北上市、東京都東大和市、静岡県磐田市、福井県高浜町、愛媛県西条市ほか、全国の自治体に対して政策提言を行ってきました。今年度も福島県南会津町や兵庫県太子町では議会改革の政策提言、藤沢市議会や横須賀市教育委員会では市民との意見交換の場でファシリテーターを務めるなど、様々な活動に取り組んでいます。なかでも注目したいのが、2年目となる静岡県焼津市との社会連携です。



横須賀市ファシリテーターの様子



焼津市役所で市長らと懇談



磐田市政策提言（オンライン）の様子



岡県内では初の試みです。5月に焼津市役所で市長から直接、学生代表に委嘱状が渡されるとともに、全員に名刺が支給されました。

SNSも活用して魅力をアピール

活動の中心となるのは3年生(15名)ですが、昨年政策提言を行った4年生(18名)もアドバイザーとして参加。移住・定住・交流という3つの班に分かれて進めていきます。

ゼミ長を務める千葉壮太郎さん(3年)は、移住班に属しています。「東京など首

若者目線で焼津をプロモーション

昨年度、牧瀬教授とゼミナールの学生達(当時3年生)は、焼津市と連携し、「人口減少の克服及び地域の活性化」をテー

きたいです」と話しました。

自分の名刺を持つことで身が引き締まったという3年生の二人。同時に、牧瀬ゼミナールに対する期待度の高さを実感し、若干プレッシャーも感じているのだとか。「現4年生による昨年度の提言が素晴らしかったので、間違いなくハードルが上がっていますね。プロモーションデザイナーの肩書きにふさわしい活動ができるよう、一丸となって頑張りたいです」と声を揃えます。

4年生の経験を後輩にリレー

アドバイザーとして参加する4年生にも話を聞きました。高校時代から地域創生に興味を持ち、公務員を志望する二階堂琴音さん(4年)は、「私が属する班は交流活性化をテーマに、焼津市内で行われるイベントのプロモーションを中心に取り組んでいます。また、昨年視察した際に、子育て世代向けの施設が充実していたので、そうした施設やグルメなどの情報もSNS等で発信していきたいと話合っています。2年間の集大成として、焼津市の活性化に繋がれば嬉しく思います」と語ります。

関野友雅さん(4年)は、ゼミナールの活動全般について「学生が政策提言まで行うのは、他大学の学部学科を含めてほとんど聞いたことがなく、貴重な学びができました。焼津市を含め、様々な自治体と連携する中で、我々学生に求められている自由な発想と現実的な実行案とのバ

ランスを図ることに苦労しましたが、それこそが成長に繋がる経験だったと思っています。信用金庫への就職が決まったので、ゼミでの経験を活かして地域に貢献したいです」と話しました。

牧瀬ゼミナールでは今後、秋にかけて焼津市で現地調査を行い、具体的なプロモーションを実行していきます。その経過は大学ホームページ等で報告していく予定です。

現場で自ら学んで成長に繋げる

牧瀬ゼミナールは、政策提言以外にも、自治体の意見交換の場にファシリテーターとして参加しています。企業や自治体の方々と接する機会が多いため、ビジネスマナーやコミュニケーション能力が自然と身につくことも強みです。来年度も既に様々な団体からオファーが来ているそうです。

ゼミ生達が口々に語るのは、「自分で考えて行動する力」が身についたということです。というのも、「牧瀬先生から伝えられるのは、テーマと大雑把な日程だけなので、嫌でもタイムマネージメント能力やゴールに向けての逆算能力が備わる」の



関東学院大学 法学部 地域創生学科 教授

牧瀬 稔

法政大学大学院人間社会研究科博士課程修了。民間シンクタンク、横須賀市役所、日本都市センター研究室、地域開発研究所を経て、2017年関東学院大学着任。

関東学院六浦高等学校の生徒制作の動画が 富山県公式ユーチューブチャンネルで公開

生徒自ら企画を立案して取り組む「PYT研修」において富山県のPR動画を制作し、社会に発信した3人の高校生。その主体的な活動を指導教員の声とともに紹介します。

行先も内容も生徒主体の研修

関東学院六浦中学校・高等学校では、学年全員で参加する修学旅行ではなく、各自の興味や関心により研修地や内容を自由に選べる「選択制グローバル研修」を国内外で実施しています。その一つが「PYT研修」です。PYTは「Plan Your Trip」の略。その意味を、指導者である柳澤聖先生は次のように語ります。

「興味や関心が多岐に渡る中高生達の、知りたい、表現したいという主体的な気持ちを大事にするため、本校の研修はあえて選択制という形を取っています。なかでもPYT研修は、学校が決めるのは往復の交通手段とホテルだけ。あとは研修内容も行程も全て生徒自身が決めて行動するのが特徴です。昨年度は京都・奈良、山陽、北陸の3コースを実施しました」

昨年、この「PYT北陸研修」に参加した高校生3人（当時2年生）のグループ

が、富山県のPR動画を制作しました。3人は「富山の魅力を、動画で広く発信したい」と、県内の観光スポットを巡って撮影を実施。編集した動画を自ら富山県庁に送ったところ、大きな反響をいただき、富山県公式チャンネルにて公開されています。



◀小栗健太郎さん

▲佐藤旬さん

▶横尾大和さん

映画のようなストーリー展開

動画のタイトルは「海と山」。その特徴は、映画のようにストーリーある作品となっていることです。

物語は同校の教室から始まります。海が好きな神奈川県男子高校生が、教室で眠気に襲われた瞬間、その意識は富山行きの電車内へとワープします。高校生は海（岩瀬浜）へと向かうと、一人の地元の若者に遭遇。「富山の魅力は山だ」と言う若者は、高校生を様々な富山のスポットへと案内します。訪れたのは富岩運河環水公園、富山市ガラス美術館、富山城址公園、宇奈月温泉、山彦橋、そして尖山での登山。途中で雷雨に襲われて下山しますが、最後は富山市役所展望塔から立山連峰や富山湾の眺望を見つめ、再会を誓う二人。次の瞬間、高校生は教室で目覚めます。高校生の不思議な体験を通して、富山の魅力を瑞々しさと疾走感に溢



◀富山県PR動画「海と山」

れた映像で紹介しています。

3人の高校生のコメント

監督と脚本を担当し、高校生役を演じた横尾大和さんは、「自主企画研修に興味があったので、3人で話し合って、新しく始まったPYT北陸研修に参加しました。同じ北陸の石川や福井に比べると、僕達は富山に関する具体的なイメージが何も湧かなくて。これは富山の魅力が知られていないからではないかと思い、PR動画を作ることにしました」と動機を語ります。

撮影担当で、エキストラも務めた小栗健太郎さんは、動画という手段について、「コロナ禍で実施されたオンライン六浦祭で、仲間と動画を作った経験が、今回の撮影に活きています。若者の視点で考えると、動画やSNSは富山の魅力を広めやすい手段ですし、今ほどの世代でも見るコンテンツなので最適だと思いました」と話しました。

3人は富山に行ったことがありません。事前の下見もできないので、絵コンテを作成し、入念に撮影計画を立てました。行程や交通手段の調整を担当し、動画では地元の若者役を演じた佐藤旬さんは、「3人で話し合いながら、富山の名所や魅力的なスポットを調べて撮影場所を見つけ、計画を立てました。撮影期間は3日間。宿泊地が石川県金沢市内なので、そこから富山までの移動時間なども考慮して行程を考えるのが大変だけど楽しかったで

す」と振り返ります。

団結力でピンチも乗り越える

物語にした意図について、3人は「一般的にPR動画は、美しい景色の映像や、観光地を紹介していく形式が多いと思います。でも、富山のことを知らない層が、そういう動画をわざわざ見に行くかなと疑問を覚えました。そこでアニメや映画のように、エンターテイメントとして見てももらえるものにしました」と話してくれました。

撮影機器はスマートフォンと360度カメラ。撮り直しはできないので、予定にないものでも、気になれば全て撮影しました。最大のピンチは最終日、尖山に登った時に予想外の雷雨に見舞われたことです。予定では、山の頂上から海を見て、海と山の魅力を伝えるラストシーンを撮るはずでした。そこで急遽調べて、富山市役所展望塔に移動して撮影を完遂。セリフもその場で決め、雷雨から逃げる様子も撮影して利用しました。こうした対応力やチームワークも見事です。

自ら富山県と交渉してPRに貢献

普段から動画編集には親しんでいたものの、PR動画や映画の編集は初めての挑戦でした。若者らしい、エネルギーあふれる映像作りをめざしたそうです。最終的に約12分の本編のほか、予告編、ショート動画の3本を作成し、自ら交渉して富

山県庁に送ったところ大好評。すぐに公式ユーチューブチャンネルで公開してくだいいました。

今回の成果について柳澤先生は、「完成した動画を最初に見た時は、そのクオリティに驚きました。価値観がどんどん変容していく現代社会では、自ら主体的に動く力はとても重要です。高校生の段階でここまで自分達が表現したいことを表現し、さらに社会への発信まで実現したのはすごいことだと思います。今後の研修でも、私達教員が思いつかないようなアイデアが、生徒達から出てくることを期待しています」と語りました。

最後に3人に将来の目標を聞きました。横尾さんは「大学でアントレプレナーシップ（起業家精神）を学び、将来は地域創生を通して日本を良くする仕事をした」と、小栗さんは「今回のように、世の中にまだ魅力が十分に伝わっていない地域を活性化させたい」、佐藤さんは「工学部に進み、工学が持つ堅苦しいイメージを払拭するようなことや、誰もが使えて情報発信できる編集ソフトの開発に挑戦したい」と語ってくれました。皆様もぜひ3人が作った動画をご視聴ください。



左から横尾大和さん、小栗健太郎さん、柳澤聖先生、佐藤旬さん。3人は中1からの友人。柳澤先生は研修の出発前夜までオンラインで行程表の確認をしてくれたそうです。



ムスリムフレンドリーなキャンパス作りをめざす

国際文化学部比較文化学科 高井ゼミナール

関東学院大学で学ぶ留学生の食の不安を解消するために
イスラム文化やハラールへの理解を広げるプロジェクトを
立ち上げた、高井啓介教授と学生達の活動を紹介します。

食から考える多文化共生

関東学院大学国際文化学部比較文化学科の高井啓介教授の専門は宗教学です。

「日本では、自分は宗教とは無関係だと思っている人が多いと思いますが、信仰の有無に拘らず、行事や冠婚葬祭など、私達の日常生活は宗教と密接に関わっています。また、宗教は美術や芸術にも影響を与えています。ゼミナールでは、そうした広い意味での宗教を取り扱っています」

高井ゼミナールでは、グローバル化が進む社会において、宗教や異文化に関連する諸問題をどう解決していくかを考えています。近年はイスラームをテーマにした調査研究を実施。その一環として、ハラールについて考える「ハラゼミ」を主催しています。

ハラールとは、イスラム教徒（ムスリム）に許されている食べ物や行為のことです。

イスラム教では豚やアルコールを含む食品や調味料が禁じられており、そうした成分を一切含まない製品にはハラール認証マークが貼付されています。しかし、日本ではハラール対応の飲食店はもちろん、ハラール認証の食材を買える店舗も少ないのが現状です。

「関東学院大学では今、グローバルなキャンパス作りをめざしています。この秋には連携協定を結ぶインドネシアの大学から交換留学生が入ってきます。実はインドネシアは世界最大のムスリム国家です。留学生の多い大学ではハラールに対応した学食がありますが、関東学院大学にはまだありません。多文化共生を謳う国際文化学部の一員として、ハラゼミでは食を通して、異文化への理解とキャンパスの環境改善に向けて活動しています」

学生達のコメントを紹介

●右井昌樹さん

ハラパンで「ミールパッソ」というハラールメニューを実際に食べてみました。肉団子入りの中華麺のような印象で、あっさりして美味しかったです。ハラパンのかたとは、日本人の口に合うメニューについても意見交換しました。また、礼拝室が併設されるなど、様々な配慮を感じました。プロジェクトに参加する前はハラールについて何も知りませんでしたが、この経験を活かして、実社会でも様々な文化背景を持つ人達と協力していきたいと思っています。



●高橋芽依さん

ハラパンを取材して、その取り組みやハラールフードについて発表したところ、多くの学生が興味深く聴いてくれました。そこで感じたのは、ハラールやムスリムについて関心がないのではなく、そもそも知らないのだということです。私自身がそうだったように、知るきっかけを作ること、理解や関心が広がっていくと思いました。この活動を通じて、多文化

共生社会の一員として知っておくべき知識を得ることができて本当に良かったです。



●畠山真優さん

調味料一つにも気を遣わなければならないため、日本でハラールフードを作ったり食べたりすることの苦勞を、今回の活動で初めて知りました。父の仕事の関係で、子どもの頃にインドネシアの方々と接する機会があったのですが、このゼミに入ってから振り返ると、実はその頃から宗教や異文化と関わりがあったのだなと気づきました。卒業後は住宅関連企業に就職し、様々なお客様と接していくので、ゼミで培った多様な視点を活かしていきたいです。



ハラゼミの学生達が作ったフライヤー



ハラールとイスラム文化を理解

ハラゼミには複数のプロジェクトが存在します。イスラームそのもののへの理解を促す班。地域のハラールカフェを調査する班。ハラールに対応した大学や施設を視察する班。そして、ハラール認定の食材を自ら買い集めてカレーを作る班などです。

今年1月、横浜・金沢八景キャンパス内で、アジアへの国際的視野を広げるイベント「グローバルウィーク・アジア」が5日間開催されました。その中でハラゼミは「ハラール・フェスタ」を1日限定でオープンし、各班が発表を行いました。また、キッチンカーが提供するハラール

ルフード「チキンオーバーライス」の引換券を来場者に配布し、その味を体験してもらいました。

今回集まってくれた3人（4年生は、地域の多文化共生をテーマに、国内にはまだ少ないハラールカフェで実際に料理を食べたり、ムスリムに配慮した環境を調査し、同フェスタで発表しました。訪ねたのは横須賀市にある「ハラパン」というカフェです。ハラパンを運営する介護事業会社は、インドネシアから技能実習生を多く受け入れており、彼らが安心して食事や交流できる環境を作りたいと、このカフェを始めました。もちろん、ムスリムに限らず誰でも利用可能です。学生達に話を聞きました。

さらなる連携や交流をめざして

高井教授は「このゼミナールの活動は社会に直接繋がっているので、大学の方針でもある、社会の中の現場にある問題を解決する力が身につくと思っています」と話します。キャンパスでの問題提起や解決への道筋を探る活動は、その先の地域や、社会全体が抱えている課題と向き合う際に必ず役に立つはずだ。

最後に高井教授は、「国際文化学部は金沢八景に移転したことで、これまで以上に国際交流に取り組みやすくなりましたし、しなければいけないと思っています。大学がアジアをはじめとする国々との連携を進めている中、ハラールの問題を含め、まだまだやらなければいけないことがあるはずです。今回はリサーチが中心でしたが、今後はさらに連携を広げて、ハラールメニューを作る体験企画や、地域のハラールマップの作成などの行動に移していきたいですし、留学生とも意見交換していきたいですね」と語りました。

同ゼミナールは、これからも異文化への理解を深め、外国をルーツとする学生や留学生が学びやすく暮らしやすきキャンパス作りをめざして活動していきます。



ハラール・フェスタでの発表の様子



関東学院大学 国際文化学部 比較文化学科 教授

高井 啓介

東京大学大学院人文社会系研究科 宗教学宗教史学 修士課程修了後、
イェール大学大学院 中近東言語文明学部 博士課程修了。
2018年関東学院大学着任、大学宗教主事も務める。

金沢八景に移転した材料・表面工学研究所 新天地で挑む技術革新と次世代技術者育成

大学発ベンチャーの先駆的存在

関東学院大学 材料・表面工学研究所は、2017年より拠点としていた神奈川県小田原市から、今年度、横浜・金沢八景キャンパスに移転しました。

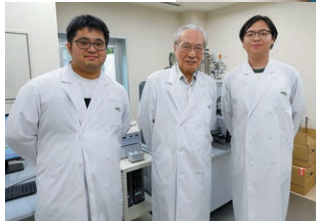
「研究所のルーツは、関東学院大学が旧制専門学校だった1946年、学内に設立した実習工場です。当初からめっき技術に定評があり、1962年に世界で初めてプラステックめっきの工業化に成功しました。この事業は、のちに学校法人から独立した関東化成工業株式会社に引き継がれ、いわゆる『大学発ベンチャー』の先駆けとなりました」

そう語るのは関東学院大学特別荣誉教授で研究所顧問を務める本間英夫先生です。プラめっき技術は自動車部品に応用され、その軽量化と燃費向上に貢献。さらに半導体やスマートフォン、精密機器、医療分野まで、今の世界になくはない重要な技術です。

「めっきや表面工学は、いわゆる縁の下の力持ち。『ハイテック、めっきがなければ、ローテック』とよく言っているのですが、どんな先端機器の回路もめっき技術がなければ社会実装できません。研究所では



実験機器が並ぶ研究所



本間先生と学生ら

今も、最先端の研究を行っています」

今年2月に文部科学省から発表された「令和4年度大学等における産学連携等実施状況について」において、関東学院大学は「知的財産権等収入」で全国11位（私大2位）、「特許権実施等件数」で全国7位（同1位）にランクインしました。これには表面工学分野における研究実績が多数反映されています。設立時から産学連携を標榜してきた同研究所。今ではどの大学も産学連携を実践していますが、この研究所のスタンスは他とは違っていると本間先生は言います。そこには校訓「人になれ奉仕せよ」の

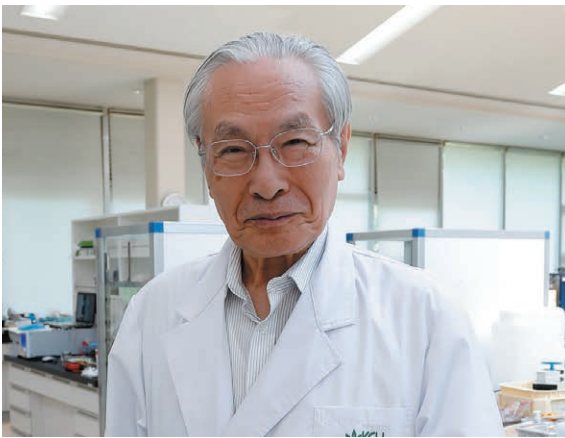
精神が息づいています。

「普通の産学連携は委託研究や共同研究の形で行うことが多いのですが、この研究所では技術供与契約により、我々が保有する特許技術を契約企業が優先的に使えるような体制にしています。一つの企業が独占するのではなく、広く社会のために研究成果を活用してもらうためです。我々は常に中立・公平な立場を貫いているのです」

現在は約45社と契約を結び、その技術供与費を研究費として還元するとともに、一部を奨学金として活用しています。表面

工学分野では今、若い技術者の育成が課題となっています。研究所では現在、文

部科学省認定の「職業実践力育成プログラム」として、「材料・表面技術マイスタープログラム」を社会人や企業の技術者を対象に実施。また、関東学院大学では、昨年度から理工学部「表面工学コース」を開設



関東学院大学 特別荣誉教授 材料・表面工学研究所 顧問

本間 英夫

関東学院大学工学研究科工業化学専攻修士課程修了。大阪府立大学工学博士学位取得後、関東学院大学工学部着任。2010年材料・表面工学研究センター（現・研究所）所長就任。現在、特別荣誉教授・顧問を務める。

関東学院大学栄養学部の田中弥生教授が監修 総合栄養食品「まるっと栄養バナナアイス」



溶けずに美味しく栄養補給

関東学院大学栄養学部の田中弥生教授が、トーニチ株式会社が開発した総合栄養食品「まるっと栄養バナナアイス」の監修に携わりました。「まるっと栄養バナナアイス」は一般的なアイスクリームの半分以下のサイズでありながら、たんぱく質やミネラル、ビタミンといった栄養成分が豊富。病気や術後で体重の落ちている人、嚥下機能が低下した高齢者や食の細い人でも、少量でバランス良く栄養補給が可能です。また、非常に溶けにくいため、時間が経っても美味しく食べられるほか、賞味期限管理が不要で、環境に配慮した紙容器を使用するなど、医療・介護現場で使いやすいポイントをい

くつも備えています。

臨床栄養学を専門とする田中教授は、地域連携型病院の管理栄養士を長年務め、急性期医療や終末期のケアに携わってきました。そうした現場での経験から、術後や病気により体重が減少した患者様や、在宅治療で栄養状態の悪い高齢者等が、どうすれば効率良く栄養を摂取できるかを研究してきました。今回の経緯について、田中教授は、「栄養学部では以前、学生が卒業研究で『溶けないアイスクリーム』を開発しています。臨床栄養の観点からみると、栄養素をもっとプラスする必要性も感じていたところ、企業から製品開発の打診があり、監修として携わることになりました」と語ります。

栄養素というのは、加えれば加えるほど、薬のような苦味や渋みが強まり食べづらくなってしまうそうで、「普通のアイスクリームと変わらない美味しさにするため、何度も試食とアドバイスをを行いました」と振り返ります。

同製品は、室温に数時間置いて溶けず、ムース状に食感が変化していきます。「一度では食べきれない場合、あるいは1日に2個食べていただく場合も、午前は冷たいアイスとして、午後はムースとし

て楽しんでいただけたらと思います」とのこと。まずは病院等で提供されていきませんが、今後もゼミナールの学生が、栄養状態の改善や体重増加にどの程度影響するかを検証していきます。

今後の課題は、「一つは、もう少し栄養価を上げることです。今は1個（46グラム）当たり86キロカロリーですが、200キロカロリー程度に増やせればと思います。もう一つは味のバリエーション。今はバナナ味ですが、毎日食べても飽きないように、チョコ

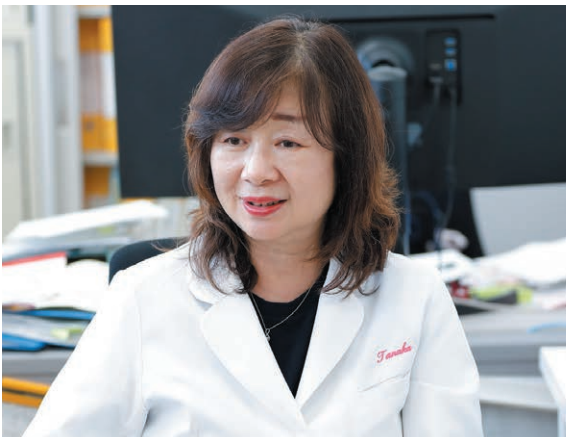
コレート味やいちご味など、フレーバーを増やしたいですね」と語ります。成長期の子どもや、栄養が偏りがちな若者にも食べてもらいたいと言う田中教授。「大学の学食や、将来はコンビニなどにも置いてもらえれば」と話します。

高齢化社会の進行により、健康維持や栄養ケアを担う管理

するなど、技術継承と次世代技術者育成に力を入れています。

「技術者には独創性や着想力が求められます。エデュケーション（教育）の語源は、エデュース（引き出す）です。学生に情熱さえあれば、少し背中を押すことで、必ず能力を引き出すことができます。そういうことは、僕は得意なんです（笑）」

未来の産業発展のため、研究と教育に取り組む同研究所に今後もご期待ください。



関東学院大学 栄養学部 管理栄養学科 教授

田中 弥生

中学校から大学まで関東学院で学び、筑波大学大学院博士課程修了（スポーツ医学）。日本在宅栄養管理学会理事等を務めるなど、臨床現場を知る研究者として多方面で活躍。

関東学院中学校でマーチングバンドと出会い 横浜から世界を目指すアーティスト

先駆者として継承と創出に挑戦

小学校から大学まで関東学院で過ごした夏井洋平さん。マーチングドラムを主な表現とした日本初のドラムパフォーマンス集団「鼓和-CORE-」（コア）の代表として、奏活動や次世代育成に努めています。

マーチングドラムに出会ったのは、中学校に入学した時。マーチングバンド部の練習を見学し、その音圧に体が震えるほど衝撃を受けたことがきっかけです。「中高時代はほぼ毎日、昼休みに先輩達と部室の小さなテレビで、アメリカのマーチングのビデオを擦り切れるくらい観ていました」とのこと。本場アメリカの魅力に惹かれ、大学2年生の時に渡米。全米のマーチング最大組織DCI（Drum Corps International）に加盟するチームの一員として、数か月に渡るツアーに参加しました。高3の時に全国優勝を果たしている夏井さんですが、「アメリカに行つて、上には上がいるのだと痛感しましたね。本場の技術やノウハウを学べた貴重な経験でした」と振り返ります。

帰国後は大学に通いながら、社会人や学生で構成されるマーチングバンドで活動。そして、就職した2006年に鼓和を結成します。平日は会社、週末は鼓和の活動や



「鼓和-CORE-」米津玄師さんコンサート出演時より

学生への指導という多忙な日々の中、転機が訪れたのは2009年。横浜開港150周年を記念して上演された、宮本亜門氏演出のショーへの出演でした。「エンターテインメントを通して感動や笑顔を多くの方に届けたい」との思いが強くなり、2011年に退職し、仲間とともに起業しました」と話す夏井さんは、ここからプロとしての活動をスタートします。

LEDの演出なども取り入れた庄巻のパフォーマンスを見せる鼓和。自主公演のほか、イベントやテレビ出演、学校の芸術観賞会等での演奏、さらに米津玄師さんや葉加瀬太郎さんなど有名アーティストのコンサート出演など幅広く活動しています。ま

た、独立当初から続いているのが、横浜港大さん橋での外国客船出港セレモニーでの演奏。乗船客の旅の思い出のページとして、大切にしている本番の一つです。

夏井さんは現在、母校である関東学院中高マーチングバンド部の指導者の一人として、打楽器パートの技術指導や楽曲のアレンジ、ショーのデザインを行なっています。指導にあたって、関東学院のカラーを大事にしつつ、「連帯感や責任感を育んで、将来何かを極めていくための土台となるような人間形成に繋げたい」と言う夏井さん。



ドラムパフォーマンス集団「鼓和-CORE-」代表、クリエイティブディレクター

夏井 洋平 さん

横浜市出身。関東学院中学校時代にマーチングバンドにてマーチングドラムと出会う。関東学院大学人間環境学部卒業後、2006年に日本初のドラムパフォーマンス集団「鼓和-CORE-」結成。2011年、株式会社UNISON COMPANY 起業。エンターテインメントの創出や次世代育成を行う。



ステージで演奏する夏井さん

関東学院六浦高等学校の男子スキー部が 神奈川県高等学校総合体育大会で初の総合優勝

関東大会とインターハイに進出

今年1月5日・6日に長野県・志賀高原で行われた第61回神奈川県高等学校総合体育大会に、関東学院六浦高等学校の男子スキー部が出場し、学校対抗戦で初の総合優勝を果たしました。同大会は全国大会（インターハイ）と関東大会の県予選を兼ねています。

学校対抗戦は、大回転と回転、両競技の総合得点（各校3名以内）によって順位を決めます。同校では今春卒業した1名を含む4名がエントリー。いずれも実力を発揮し、総合優勝に貢献しました。また、4名全員が関東大会、各競技2名がインターハイへと進みました。

大回転・回転ともに3位入賞してインターハイ出場を決めた橘悠真さん（当時2年生）は、「高1の時は借しくもインターハイの切符を逃したので、今年は絶対に行くんだという気持ちが大きかったです。初日の大回転でインターハイ出場が決まったので、2日目の回転は思い切って滑りました」と振り返ります。

回転で5位入賞してインターハイ出場を決めた同学年の石川颯真さんは、「大回転ではインターハイを逃して悔しかったです

が、翌日は得意な回転ということもあり、気持ちを切り替えて臨みました。これまで気に掛けてくれた顧問の先生に、結果で返そうと思つて頑張りました」と語ります。

当時高校1年の佐野太一さんは、「初出場で少し緊張しましたが、今回は関東大会（1月下旬・群馬）をめざしていたので、第一目標はクリアできました。関東大会ではレベルの高い選手達の滑りを肌で感じ、良い経験ができました」と話しました。

大会に引率した肥田信長先生は、「前年は緊張して力を出し切れない選手もいたので、今回はリラックスした雰囲気を中心掛けました。眼の治療で現地に来られなかった瀬下先生に、皆で良い報告ができました」と語ります。なお、インターハイは2月に富山県で開催され、橘さんは「回転競技では自分の力が全国でも通用すると実感できた」、石川さんは「悔いなく、楽しんで滑ることができた」と納得のいく滑りを披露しました。

顧問の瀬下修先生は、「彼らはそれぞれ長野県や群馬県のレーシングチームに所属し、オフシーズンは陸上トレーニング、シーズン中は毎週末ゲレンデに行つて雪上トレーニングやレースに参加しています。その努力の結果、雪国の選手達にも引けを

取らない実力を見せてくれました。そうした彼らの努力や勇姿を、学内の皆さんにもっと知ってもらえたら嬉しいですね」と語ります。

なお、3名は3月に新潟県で行われた神奈川県高等学校スキー新人大会に出場し、回転競技で優勝と4位、大回転競技で2位、総合2位という好成績を収めています。



石川颯真さん（3年）、橘悠真さん（3年）、佐野太一さん（2年）



◀彼らの勇姿はコチラ

関東学院へのご支援のお願い

日頃より関東学院の活動に対して、深いご理解とご賛同をいただき、物心両面に渡るご支援を賜っておりますこと、厚く御礼申し上げます。

関東学院は、横浜に根ざした私立学校として、建学の精神「人になれ 奉仕せよ」のもと、教育、研究、地域活動、社会連携活動に尽力しております。

私たちが大切にしてきた「人になれ 奉仕せよ」という校訓には、いつの日か人と社会に貢献できる人材になるために、聖書をはじめ、さまざまな書に触れ、学び、努力し続けなさい、という意味が込められています。

そのためには、関東学院での学びを通して、知識や技術を修得することは勿論のこと、幅広い教養を持ち、慈愛に満ちた、個性豊かで知性溢れる若者を育ててゆくことに全力を尽くします。

私どもの教育理念にご賛同いただける皆様、学院各校と繋がりのある企業・団体の皆様、そして20万人を超える学院各校の卒業生の皆様にも母校と後輩のためにお力添えをいただければ幸いです。

関東学院の発展にご理解ご賛同いただき、あたたかいご支援を賜りたく、お願い申し上げます。

寄付に関するお問い合わせ

学校法人関東学院 募金・校友課
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-2685
FAX 045-786-5729
Mail bokin@kanto-gakuin.ac.jp



関東学院大学 保証人の皆さまへ LINE 開設のお知らせ



関東学院大学では、「大人の教養」として大学の研究成果をはじめとした「知」に親しんでいただけるシンポジウムや生涯学習講座などの最新情報をお届けするため、新たに公式 LINE を開設いたしました。

本学の最新情報をお受け取りいただけるよう、この機会にぜひ、LINE アカウントのお友達登録をお願いいたします。

LINEに関するお問い合わせ

関東学院大学 広報課
TEL 045-786-7049
Mail kouhou@kanto-gakuin.ac.jp



LINEのお友達登録はこちら

